

我が国の古代の僧が持ち合わせていた仏教思想と彼等による土木事業について*

The Buddhist Thought and Civil Engineering Works Concerned with Ancient Japanese Buddhist Priests

西山 孝樹**, 藤田 龍之***, 知野 泰明****

By Takaki NISHIYAMA, Tatsushi FUJITA, Yasuaki CHINO

要旨

我が国の土木史研究は、近世以降が主な対象時代となっており、それ以前で明らかになっている史実は非常に少ないのが現状である。平安中期（A.D.1000年）前後頃から近世初頭（A.D.1600年）の約600年間は、「国家主導の大規模土木事業空白の時代」と考えられる期間が存在した。その間は、土木事業が全く展開されなかったわけではなく、僧侶により社会福祉事業の一つとして行われていた。

そこで本研究では、どのような思想を持って当時の土木事業が行われていたのか、その一端を明らかにするため、古代における僧侶が持ち合わせていた仏教思想と彼等の活躍を、元史料の確認を基本として、文献史料を中心にまとめた。また、中でも特に行基による数多くの土木事業が実際に行われたのかの確認と空海による溜池改修は仏教思想に端を発したものではなかったことを示した。

1. はじめに

我が国の土木史については、明治時代を中心として近世以降の研究が盛んに行われているが、それ以前の実態は明らかになっていないのが現状である。そこで、古代の土木事業を遡ってみていくと、3世紀から6世紀にかけて、大阪府堺市に現存する全長486m、幅305mもの大規模な大仙陵古墳（現、仁徳天皇陵）に代表される古墳が畿内を中心に全国各地で造営された。その後、大化2(646)年には薄葬令が發布されたことも相まって、7世紀末か8世紀の始めには古墳の造営が終焉を迎える事となった¹⁾。

奈良時代に入ると、国家事業として東大寺大仏殿（金堂）等の木造大建築構造物が次々と建造されていったのに対して、土木構造物はほとんど見当たらない。敢えて挙げるとするならば、天智天皇3（664）年の福岡県太宰府に築かれた防衛のための「水城」、700年初頭の『古事記』、『日本書記』の国史に記載されている狭山池（大阪府）や大宝年間（701～704）の満濃池（香川県）の築堤が新規事業としてみられるものの²⁾、それ以降では、文永11（1274）年の「元寇防塁」まで下ってしまい、近世初頭まで目立った土木事業は見られない³⁾。

『明治以前日本土木史』の中世の記述をみても、河川

に関するものでは「前述の如く本邦に於ける河川工事は、既に仁徳天皇以降歴代之に意を注がれしが、其事蹟の記録に傳はるもの寔に尠し。」⁴⁾とある。溜池・灌漑等に関する章では、地方の事跡は所々で見られるものの室町時代の節では「此時代には農業政策は文書の徴すべきもの少く、耕地開發池溝水利の如き恒久的事業は、地方自治の私的機關によりて經營せられたるが如きも、其史實を明にし難し。」⁷⁾と表現されている。中世を語るには甚だ具体的な事例が少なく、言い過ぎであるかもしれないが、「国家主導の大規模土木事業空白の時代」と呼べる様相を呈している。

日本における低地を乱流する利根川などの大河川をある程度コントロールして、沖積低地上の開発ができるようになるのは、戦国期から近世中期の河川改修や新田開発を待ってからである⁸⁾。

筆者は、これまでの研究で近世中期以前の紀州（和歌山県）を流れる紀の川上・中流域での灌漑水利状況を明らかにしてきた⁹⁾。中世では、紀の川に注ぎ込む小規模な河川に設けた堰や谷筋に溜池を築堤して灌漑が行われた。近世初頭には、高野山を中心に活躍し、豊臣秀吉からの厚い信頼を受けて全国各地の寺社を造営、修理にも関与した僧、応其上人が紀の川流域の溜池や用水路の事業に携わった¹⁰⁾。江戸時代に入ると、紀州藩の役人である井沢弥惣兵衛為永や大畑才藏等の武士によって紀の川の流れを固定化する堤防の築堤、背後にはその紀の川から取水する用水路が開削された。大規模土木事業が次々に行われ、紀の川に対して横断方向の開発から本格的に大規模な縦断方向の新田開発へと転化していった。

*Keywords: 福田, 知識, 勸進, 行基, 空海

**学生員 修士（工学）日本大学大学院工学研究科土木工学専攻

***正会員 工学博士 日本大学工学部土木工学科上席客員研究員

****正会員 博士（学術）日本大学工学部土木工学科准教授

（〒963-8642 福島県郡山市田村町徳定字中河原1）

そこで本研究では、土木事業の主導者として、武士が出現する近世初頭まで¹¹⁾、中世の土木は何を牽引として進んでいたのかを明確にし、「国家主導の大規模土木事業空白の時代」の背景となった真実について迫りたい。

2. 研究方法

我が国に於いて、平安時代初頭から近世初頭まで「国家主導の大規模土木事業空白の時代」であったとみられることを述べてきたが、土木というものが全くなかったわけではない。空白の時代とされる以前から指導的な立場で僧たちが土木に携わっていた記録が多く、仏教と土木に深い繋がりがあることは従来から指摘されてきた¹²⁾。

そこで本研究では、彼等が持ち合わせていた仏教思想に迫り、それを背景に仏教が伝来した A.D.538年或いは A.D.552年から平安時代中期の A.D.1000年前後までに活躍した僧による土木事業についてもまとめた。

先行研究として、高橋裕他によってわかりやすく子供向けにまとめられた『人をたすけ国をつくったお坊さんたち』¹³⁾も参考に元史料の確認を基本とし、再検討した。

3. 土木に関する仏教思想について

古代に於いて土木事業で活躍した僧をまとめていく中で、それらに共通する思想が仏教の中でみえてきた。以下、特に土木に関連する思想をまとめた。

(1) 福田思想

日本に仏教が伝来し、その中に福田という思想が含まれていたと考えられる。福田とは、『日本国語大辞典』¹⁴⁾によると、

「田がよく物を生ずるように、福德を得させる人のこと。

仏や僧、父母、貧者などを敬い、施しを行うとき、多くの福德を生み、功德が得られるところから、これを田にたとえていう。」

また、図-1には、福田の発達してきた過程を図化したものである。福田に関する研究は盛んに行われており、竹内理三¹⁵⁾等によると、当初、三福田であった敬田（仏や僧を恭敬田）、恩田（父母や師を報恩福田）、悲田（貧者や病者を貧窮福田）があった。その中の悲田が物質的な貧窮者だけではなく、疾苦や旅苦¹⁶⁾をも加え、それに対する種々の設備をも福田と称した。そして、『大藏経』「諸徳福田経」¹⁷⁾では七福田、「梵網経」には八福田¹⁸⁾とその種類が拡大されていった。以下に、七福田の事業内容を示す。

- ①近道作井渴乏得飲（井戸の設置）
- ②園果、樹木清涼、浴池（果樹園、入浴する池の整備）
- ③安設橋梁（橋梁設置）
- ④作牢堅船（船を造り人民の済度）
- ⑤僧房堂閣（寺、僧房、堂舎の建立）
- ⑥施医療（医療行為）
- ⑦道边作圀廁（便所の設置）

七福田のなかで、土木に関連するものは①、②、③、⑦が該当すると思われる。このような行為は、大乘仏教で

は菩薩行の一つである利他として、僧侶の社会的実践の基本とされてきたという。利他とは、自分を犠牲にして、他人のために尽くして、人々に功德・利益を施して救済することを指す¹⁹⁾²⁰⁾。

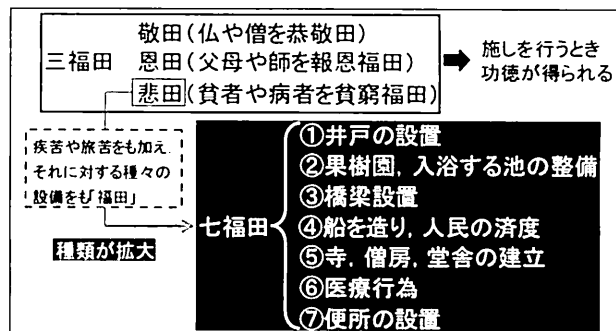


図-1 福田思想の発展過程概略図（作図：西山）

(2) 知識

その福田思想を受けて、知識が行われたと考えられる。『大辞泉』²¹⁾によると、現在の知識の語意は、「知ること、認識、理解すること。また、ある事柄などについて、知っている内容。」

と示されている。しかし、多田伊織²²⁾によると古代、中世における知識とは、

「僧尼の勸化に応じ仏事の結縁のため財物や労力を提供してその功德にあずかろうとする者をいい、さらにはその動機・行為や寄進した資財、結成された団体をもいう。」

という意味で用いられていた。それに関連して、結成した組織を「知識結」、中心となる者を「知識頭」、知識を呼びかける文書を「知識文」と様々な用語も存在した。

知識を介した仏事は、造寺、造像、写経等があり、中でも有名なものとして、行基による東大寺盧舎那仏像の造立が挙げられる。天平15(743)年『続日本紀』²³⁾には、「粂に於きて天平十五年歳癸の未に次る十月の十五日を以て菩薩の大願を發して盧舎那仏金銅の像一軀を造り奉る。國の銅を盡くして象を鎔かし、大山を削りて以て堂を構へ、廣く法界に及して朕が知識と為す。」と書かれている。建碑、架橋もまた知識の内の一つに含まれる。

(3) 勸進

知識と同様の意味合いで用いられる語として、勸進があり、『大漢和辞典』²⁴⁾によると、

- ①いざなひすすめる。
- ②イ 善行をすすめて佛道に入らしめること
ロ 僧徒などが、堂塔などの建立に、俗人を勧めて財物の寄附をさせること、勸化。

と二つの語意が示されている。松尾剛次²⁵⁾、太田直之²⁶⁾等は、

「勸進とは、もともとは、仏教用語で人を勧めて仏道に入らせ、善根・功德を積ませることを意味したが、平安時代の終わりごろからは、寺社の堂塔や仏像の造立・修理のために、人々に勧めて米・銭の寄付を募る

ことを意味するようになった言葉である。」

当初から仏教用語であったと述べている。しかし、中国の天鳳年間（14～19）の『漢書 第十二冊 卷九六至卷一〇〇（傳六）「漢書卷九十九下 王莽傳第六十九下」』²⁷⁾には、

「四年五月，莽曰…「保成師友祭酒唐林，故諫議祭酒琅邪紀遷，孝弟忠恕，敬上愛下，博通舊聞，德行醇備，至於黃髮，靡有愆失。」

（中略）

諸侯，辟，任，附城，羣吏亦各保其災害。

幾上下同心，勸進農業，安元元焉。」莽之制度煩碎如此，課計不可理，吏終不得祿，各因官職爲姦，受取賂賂以自共給。」

とある。松尾等がもともとは仏教用語であると述べているが、古くは『漢書』にあるように、中国では推し進めるという意味で定着していたのであろう。その後、日本では仏教用語として『仏説觀無量壽經』²⁸⁾や以下に示す『妙法蓮華經』²⁹⁾で散見する。

「初不勸進 説有實利 如富長者 知子志劣
以方便力 柔伏其心 然後乃付 一切財寶」

ここまで、勸進の語源を中心に述べてきた。

続いて、日本の勸進事業についてみていくと、天平15（743）年『続日本紀』³⁰⁾では、

「乙酉（十九日），皇帝紫香樂の宮に御す。盧舍那仏の像を造り奉らむが爲に始めて寺の地を開く。是に於きて行基法師，弟子等を率ゐて衆庶を勸め誘く。」

古代では勸進ではなく、勸誘という表現がみえる。勸進は中世以降に用いられることが多い。例えば、平安時代末期から鎌倉時代にかけて活躍した重源は、東大寺再建のため、養和元年（1181年）に初代の大勸進職に任命された。土木事業にも関与し、行基も携わった狭山池を改修したことが発掘からも明らかになっている僧侶である。また、五米重³¹⁾のように行基の一連の事業を知識ではなく、勸進を当てて用いる論者も存在する。知識と勸進の語義は、同じと考えていいのではないだろうか。

4. 古代の土木に関わった僧について

3章で述べてきた仏教思想を背景として、古代には僧による土木事業への関与があった。ここでは、土木に関わったことが明確である行基や空也に関する史料及び技術史³²⁾³³⁾や中世史³⁴⁾を整理することで、図-2に示した僧による土木への関与が見出された。元史料を提示し、生没年を追って詳しくみていく。

その中でも行基は、古代に活躍した僧のうちで具体的な業績が最も明らかにされている人物であるが、その信憑性を再検証することで新たな見解を4(2)で示した。一方の空海は、他の僧が持ち合わせていた仏教思想に発し、溜池改修事業に携わったわけではなかったことを4(3)で明らかにした。

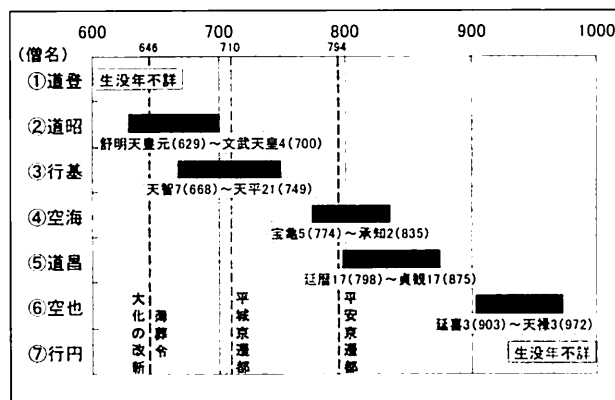


図-2 土木に関わった僧の生没年一覧³⁵⁾

（1）古代に活躍した僧による土木事業

①道登は、『宇治橋断碑』³⁶⁾によると、大化2（646）年に宇治橋を作ったとされる。

「其疾如箭 修（修征人 停騎成市 欲赴重深
人馬亡命 從古至今 莫知杭竿）世有釈子 名曰道登
出（自由尻 惠満之家 大化二年）」

※括弧内は、江戸時代に補修した部分

②道昭の記録として、文武天皇4（700）年『続日本紀』³⁷⁾には、

「後に天下を周遊し、路の傍に井を穿ち、諸の津渡の處に船を儲け橋を造る。乃ち山背國の宇治の橋は、和尙の創めて造れる者なり。」

とあり、道昭が始めて宇治橋を架けたと記されている。道登、道昭による宇治橋の架橋は、ほぼ同時期であると考えられる。その見解として、どちらかが主導したとみるものがある。さらに、道昭が関与したとすれば、事業を始めたのが18歳と若いため、誤りであるとする江戸後期に編纂された『古京遺文』³⁸⁾が存在する。論者によって様々であり、結論づいていないのが現状である。

③行基は、道昭の弟子であったともいわれ、古代に活躍した僧侶の中で最も事績が詳しく同章(2)で後述する。

④空海については、他の僧侶等と土木事業に対する関わり方が異なるため、同章(3)で述べる。

⑤道昌は、『元亨釈書』³⁹⁾によると、

「大井河溢。昌薫防遏。衆人子來。不日而成。故老拭淚曰。不料今復見行基菩薩。」

京都の大井河堰を修理したとされ、土木に関する業績は、この一事業のみが伝わる⁴⁰⁾。

⑥空也は、市中に念仏を勧めて廻り、諸国を巡って社会福祉事業を行った。天禄3（972）年の空也が没した年に源為憲（941～1011）が書き記したとされる『空也上人誄』⁴¹⁾には、

「若觀道路之嶮巇，預歎人馬之疲頓，乃荷鋤以鏟石面，而投杖以決水脈。」

若いときから鋤を用いて険しい道路を整え、杖を投げて水脈を当てていたとしている。12年後、慶滋保胤（943頃～1002）が記した『日本往生極楽記』⁴²⁾では、

「沙門弘（空）也。不言父母。亡命在世。或云。出自横

流口。常唱彌陀佛。故世號阿彌陀聖。或住市中作佛事。
又號市聖。過嶮路即鑿之。當無橋亦造之。見無井則掘之。號曰阿彌陀井。」

『空也上人誄』に書かれた事績に加え、橋の造営と井戸の掘削、その井戸の名を「阿彌陀井」といったことが加わる。石井⁴³⁾も述べているが、特に空也は史料に恵まれてはいるが、行基のように具体的な事業が挙げられているわけではなく、事実が述べられるだけに過ぎない。

⑦行円は、藤原実資の『小右記』⁴⁴⁾、長和5(1016)年4月10日の記述を見ると、

「從九日可令往還人拾栗田山石、又以鉄槌・鑽等、可破大石、忽令作鑽二可与者、(略)
皮聖從昨日令拾小石、亦破大石、往還人響應拾之、又大石少々破得、往反車馬破石之處既無停滯云々」

栗田(京都)の往還で通行人の協力を得て、石を拾い、大石を破る等して道路の整備をし、藤原実資に鉄槌と鑽の調達を求めたという⁴⁵⁾。また、石を破った箇所は、車や馬が停滯することなく通行することができたとも書かれている。

ここまで、行基、空海を除く僧について述べてきた。
(2) 行基が関与した土木事業について

行基は、古代において最も土木事業に関与したことが知られ、史料にも恵まれている僧である。実際にそこまでの活動を行ったのであろうか。

行基が没した486年後の文暦2(嘉禎元、1235)年、奈良の竹林寺にある行基の墓から行基の舍利(遺骨)が納められていた銀瓶が掘り出された⁴⁶⁾。それが納められていた銅筒に墓誌が刻まれていたが、現在では18字分を刻んだ破片が残るだけである。唐招提寺には全文の写しが『大僧上舍利瓶記』⁴⁷⁾として現存するものの、土木事業に長けていたことには触れられていない。

『続日本紀』⁴⁸⁾天平21(749)年二月丁酉条には、
「又親ら弟子達を率ゐて諸の要害の處に橋を造り、陂を築かしむ。(略)

留止する處には皇道場を建て、其の畿内には凡そ四十九處、諸道にも亦往々に在り。」

と書かれ、具体的な事業内容はこの史料からも読み取れない。

行基の事績が詳細まで記述されているのは、安元元(1175)年に成立したとされる『行基年譜』⁴⁹⁾である。天平13(741)年記には、

「橋六所、直道一所、池十五所、溝七所、樋三所、船息(港)二所、堀四所、布施屋九所」

とあり、表-1に示したように具体的な事業名称も併せて記されている。『行基年譜』は、井上薫等⁵⁰⁾⁵¹⁾の研究によって、天平13(741)年までの行基の事業を記載した一次史料であるとされる。それ以外の行基に関する史料として『行基菩薩伝』⁵²⁾には、

「僧院卅四、尼院十五院、橋六所、樋三所、布施屋九處、船息二所、池十五所、流七所、堀川四所、直道一所、大井橋一所。」

天平勝宝元(749)年己丑二月五日に彫られた『昆陽寺鐘銘』⁵³⁾には、

「広取五箇国内、建立僧尼院四十九所、布施屋九所、船息二所、橋梁六所、堀河四所、溉樋三所、池十四所、(土へんに果)廿所、溝流七所、大井垣一所、直所欲令蒼生得其利也」

これら二つの史料は、『行基年譜』と同一の史料を用いて書かれたと思われる。最近の研究で『行基年譜』が行基生存中の史料を用いていることが明らかにされつつあるとはいえ⁵⁴⁾、亡くなってから約400年の月日を経て編纂されたものである。さらに、現在伝わっているのは明治18(1885)年に書写された伝本のみであり、その途中で事績を加筆・修正されている可能性も捨てきれないのである。

また、図-1に示した『大藏経』『諸徳福田経』の七福田と行基の事業内容を比較すると、②果樹園、入浴する池の整備(溜池築堤に関連する項目に該当か)、③橋梁設置、④船を造り人民の済度、⑤寺、僧房、堂舎の建立の項目と一致する。後世になって、行基の活躍を七福田の仏教思想になぞらえ、後世になって付け加えられた事績もあったのではないかと考えられる。

古代の僧の中で、行基だけが細かな部分まで明瞭になっているのは不自然であるし、冒頭に述べた『大僧上舍利瓶記』には、土木事業に触れられていないことも加味して、彼の活動を再検証する必要がある。

表-1 『行基年譜』に記載された土木事業一覧⁵⁵⁾

橋 [6]	泉大橋、山崎橋、高瀬大橋、長柄(橋)、中河(橋)、堀江(橋)
直道 [1]	高瀬より生駒大山へ登る道
池 [15]	狭山池、土室池、長土池、薦江池、櫛尾池、茨城池、鶴田池、久米多池、物部田池、*陽土池、同下池、院前池、中布施尾池、長江池、有部池
溝 [7?]	古林溝、*陽上溝、同下池溝、長江池溝、物部田池溝、久米多池溝
樋 [3]	高瀬堤樋、韓室堤樋、茨田堤樋
船息 [2]	大輪田船息、神前船息
堀 [4]	比賣嶋堀川、白鷺嶋堀川、次田堀川、大庭堀川
布施屋 [9]	大江布施屋、泉寺布施屋、*陽布施屋、垂氷布施屋、度布施屋、楠葉布施屋、石原布施屋、大鳥布施屋、野中布施

(3) 空海の土木事業について

大宝年間(701~703)に築かれたといわれている満濃池は、空海が関与したことで知られている。宮坂有勝等⁵⁶⁾⁵⁷⁾の既存研究では、

「大師は弘仁十二年(821)六月より三ヵ月をかけて、四国讃岐の満濃池を修築する大工事を完成させている。」

という見解で一致し、多くの文献に記載されているが、参考文献を明示しているものは『明治前日本土木史』⁵⁸⁾が挙げられる程度で非常に少ない。そこで、原史料である『日本後記』⁵⁹⁾弘仁12(821)年5月の部分を以下に示す。

「壬戌、讃岐国言、始自去年、隄満濃池、公大民少、成功末期、僧空海此土人也、山中座禪、獸馴鳥狎、海外求道、虚往実帰、因茲道俗欽風、民庶望影、居則生徒成市、出則追従如雲、今離旧上、常往京師、百姓恋実

如父母，若聞師來，必倒履相迎，伏請充別當，令濟其事，許之，」

森田悌⁶⁰⁾の訳を次に示すと、

「讃岐国が次のように言上した。去年から満濃池の堤を修造する工事を始めていますが、事業規模が大なのに対し差発できる民は少なく、まだ完了していません。ところで、僧空海は当地出身の人物で、山中で修行して鳥獣に親しみ、海外にまで仏教の真理を求め、学問を積んで帰国しました。そのため、出家人も俗人も空海の風貌を敬い、人々は空海の姿を仰ぎ見えています。空海が留まる所には教えを請う者が市をなし、出行するとあとを追う者が雲のごとくとなります。いま、空海は郷里を離れ、平安京に住んでいます。百姓は父母のごとく恋慕しており、空海が来ると聞きますと、履物を逆さにしたまま慌てて迎えるほどです。伏して、空海を満濃池修造事業の別當に起用して完成させることを請願します。言上を許可した。」

同年6月には、新銭（富寿神宝）2万貫を弘法大師に施捨している。施捨とは、『日本国語大辞典』⁶¹⁾によると、「神仏や慈善事業などに、金品を寄付すること。施与。喜捨。」

という意味であり、政府の権限で貨幣を新たに製造し、満濃池の築堤費用に当てたと考えられる。

当時、個人が偽の貨幣を製造することは大変重い罪であったことが『日本後紀』⁶²⁾の記述から窺える。

「其改承和十五年，為嘉祥元年，自今日味爽以前大辟以下，罪無輕重，未發覺，已發覺，未結正，已結正，繁囚見徒，咸皆赦除，但犯八虐，故殺謀殺，私鑄錢，強竊二盜，常赦所不免者，不在赦例，」

以下に訳を示すと⁶³⁾、

「そこで承和15(848)年を嘉祥元年とし、本日の未明以前に犯された死罪以下の罪は軽重を問わず、未發覺、已發覺、未結正、已結正ともに免し、収監されている徒囚はすべて放免することにする。ただし八虐・故殺・謀殺・私鑄錢・強竊二盜および常赦の対象とならない罪人は赦さない。」

通常、私鑄錢に関する犯罪は、恩赦が行われる際にも許されない行為であり、不足する費用を新たに鑄造した貨幣で対応することは、政府だからこそ可能なことだったのである。

ここで、原史料を提示したことで明らかになったことをまとめておく。満濃池は、既に前年度から事業が行われており、それはあくまでも修理であった。その規模に対して必要な人夫が少なかったため、当時から人気が非常に高かった空海を都から呼び寄せ、空海がいれば人が集まろうと当てにした工事であったと考えられる。

また、人々が工事に携わることに消極的だった他の要因として、民衆の中に土に対する恐怖心や携わることを避けていたのではないかと考えられる。

空海自身が卓越した土木技術を持っていた事を示す記述はみられず、それを見込んで別當に起用されたので

はなかった。

行基や忍性の持ち合わせていた人民救済や修行の一端に主眼を置いた同時代の土木事業に関わった僧侶等の仏教思想に端を発したものと異なっていたと言えよう。

5. まとめ

古代において仏教と土木は、密接な関係にあったといえる。僧侶が人々を救済する意思を持ち、福田事業に取り掛かるとしても一人ではできないし、金銭も必要になってくる。そこで、その功德にあずかりたいという人々から知識を求め、金銭、作業集団を得ることに成功した。互いの要求が合致して古代における社会福祉事業が進められていき、その一つとして土木があったのである。

その後の平安時代後期から鎌倉時代にかけて、律宗の叡尊や忍性、浄土宗の重源が活躍したが、福田思想よりも勸進によるもので、古代に活躍した僧と思想が異なるため、今回の報告としたい。

今後の課題として、古代の土木を解明していく過程で具体的な業績が行基以外で見えてこない点が挙げられ、実像に迫ることは難しい。日本で橋梁は土木の分野であるが、中国では建築に含まれるように、現在の土木とされる分野を古代にそのまま適応させることはできない。

本研究では、土木に関わった僧侶に注目したことで彼等の実情が見えてきた。今後、他の人物が土木事業で活躍した可能性も含め検討していく必要がある。また、文献史料を中心に考察を進めてきたが、発掘調査された遺構やその報告書を土木工学の専門的な視点から精査し、複合的に活用することで当時の技術面に迫ることができると思われる。

大規模事業がなかったという事実に目を向け、根本的な土木史を再考する必要がある。

参考文献

- 1) 白石太一郎:『古代を考える 終末期古墳と古代国家』古墳の終末と古代国家、吉川弘文館、pp.302～314,2005.
- 2) 河上邦彦:『古墳が消えるとき』終末期古墳から火葬墓へー大和を中心としてー、奈良県立橿原考古学研究所、pp.8～9,p.45,1997.
- 3) 鈴木達也、藤田龍之、知野泰明:『六国史・風土記に見られる古代日本の土木事業に関する文献調査』土木史研究講演集 Vol.25、pp.333～338,2005.
- 4) 高橋裕:『現代日本土木史 第二版』、彰国社、日本土木史年表,2007.
- 5) 三浦基弘、岡本義喬:『日本土木史総合年表』、東京堂出版、pp.34～51,2004.
- 6) 土木学会:『明治以前日本土木史』、岩波書店、p.14,1936.
- 7) 同前 6) pp.265～266.
- 8) 松浦茂樹:『国土の開発と河川一条里制からダム開発までー』、鹿島出版会、pp.1～6,1989.

- 9) 西山孝樹,知野泰明:紀の川上・中流域における近世中期以前の灌漑水利の変遷,土木史研究講演集, Vol.30,pp.301~304,2010.
- 10) 西山孝樹, 知野泰明:応其上人に関する研究, 土木史研究講演集, Vol.28, pp.111~117, 2008.
- 11) 前掲4)p.36.
- 12) 中尾堯:『中世の勸進聖と舍利信仰』, 吉川弘文館, pp.154~180, 2001.
- 13) 高橋裕監修,加古里子,緒方英樹:『人をたすけ国をつくったお坊さんたち』, (財) 全国建設研修センター, 1997.
- 14) 日本大辞典刊行会:『日本国語大辞典 第17巻』, 小学館, p.328, 1975.
- 15) 竹内理三:『奈良時代に於ける寺院経済の研究』, 角川書店, pp.248~254, 1998.
- 16) 旅苦とは, 旅で苦しむことを指す.
- 17) 吉田靖雄:『行基と律令国家』, 吉川弘文館, pp.280~298, 1987.
- 18) 国民文庫刊行会:『国訳大藏經 經部 第三巻』, 「梵網經解題」一~十二, 1927.
- 19) 日本大辞典刊行会:『日本国語大辞典 第20巻』, 小学館, p.335, 1976.
- 20) 中尾堯:『旅の勸進聖 重源』, 吉川弘文館, pp.188~189, 2004.
- 21) 松村明:『大辞泉』, 小学館, p.1704, 1995.
- 22) 多田伊織:『日本霊異記と仏教東漸』, 法蔵館, pp.145~201, 2001.
- 23) 今泉忠義:『訓読 続日本紀』, 臨川書店, p.14, 1986.
- 24) 諸橋轍次:『大漢和辞典巻二』, 大修館書店, pp.362~363, 1956.
- 25) 松尾剛次:『勸進と破戒の中世史—中世仏教の実相—』, 吉川弘文館, p.1, 1995.
- 26) 太田直之:『中世の社寺と信仰 勸進と勸進聖の時代』, 弘文堂, p.1, 2008.
- 27) 班固:『漢書 第十二冊 卷九六至卷一〇〇 (傳六)』, 中華書局, pp.4099~4147.
- 28) 中村元, 早島鏡正, 紀野一義:『浄土三部經 (下) [全二冊]』, 岩波書店, pp.43~81, 1964.
- 29) 坂本幸男, 岩本裕:『法華經 (上) [全三冊]』, 岩波書店, pp.255~258, 1962.
- 30) 前掲 22)p.363.
- 31) 五来重:『増補 高野聖』, 角川書店, pp.39~40, 1975.
- 32) 永原慶二, 山口啓二:『講座・日本技術の社会史 第六巻 土木』, 日本評論社, 1984.
- 33) 門脇禎二, 朝尾直弘:『京の鴨川と橋』, 思文閣出版, 2001.
- 34) 三浦圭一:『日本中世の地域と社会』, 思文閣出版, 1993.
- 35) 『国史大辞典』を基に筆者作成.
- 36) 国史大辞典編集委員会:『国史大辞典 第二巻』, 吉川弘文館, p.84, 1980.
- 37) 前掲 22)p.408.
- 38) 杉本つとむ:『異体字研究資料集成二期七巻』, 雄山閣出版, pp.315~317, 1995.
- 39) 望月二郎:『元亨釈書』, 経済雑誌社, pp.684~685, 1901.
- 40) 国史大辞典編集委員会:『国史大辞典 第10巻』, 吉川弘文館, p.108, 1989.
- 41) 石井義長:『空也—我が国の念仏の祖師と申すべし—』, ミネルヴァ書房, 資料1 空也上人誄, 2009.
- 42) 塙保己一:『群書類従・第五輯』, 續群書類従完成会, p.403, 1930.
- 43) 前掲 40)pp.99~100.
- 44) 大塚信一:『小右記 (四)』, 東京大学史料編纂所, p.178, 1967.
- 45) 前掲 40)pp.125~127.
- 46) 速水侑:『民衆の導者 行基』, 吉川弘文館, pp.13~16, 2004.
- 47) 井上薫:『行基事典』, 国書刊行会, pp.276~293, 1997.
- 48) 前掲 22)p.408.
- 49) 前掲46)pp.266~269.
- 50) 同前46)pp.252~255.
- 51) 井上薫:『人物叢書 行基』, 吉川弘文館, pp.276~293, 1959.
- 52) 塙保己一:『群書類従・第八輯下』, 續群書類従完成会, pp.439~442, 1927.
- 53) 細川公正:行基の仏教と社会事業, 『日本名僧論集 第一巻 行基 鑑真』, 吉川弘文館, pp.90~92, 1983.
- 54) 前掲50)pp.37~39.
- 55) 前掲46)を基に筆者作成.
- 56) 宮坂宥勝:『空海 生涯と思想』, 筑摩書房, pp.37~38, 1984.
- 57) 和多秀乗, 高木諄元:『日本名僧論集第三巻 空海』, 吉川弘文館, pp.1720, 1982.
- 58) 前掲 6)p.576.
- 59) 森田悌:『日本後紀 (下)』, 講談社学術文庫, pp.102~103, 2007.
- 60) 同前58)p.102.
- 61) 日本国語大辞典第二版編集委員会, 小学館国語辞典編集部:『日本国語大辞典第二版第七巻』, 小学館, p.1347, 2001.
- 62) 前掲58)pp.290~291.
- 63) 同前58)p.296.